

目次

序……………金田一春彦…3

国語学会会報 一(昭和二十一年九月十日)……………7

国語学会会報 二(昭和二十一年十月十日)……………12

国語学会会報 三(昭和二十一年十一月十五日)……………24

国語学会会報 四(昭和二十二年一月十五日)……………31

国語学会会報 五(昭和二十二年三月十日)……………42

国語学会会報 六(昭和二十二年十月十日)……………48

国語学会会報 七(昭和二十二年十一月一日)……………54

国語学会会報 八(昭和二十三年一月三十一日)……………73

国語学会会報 九(昭和二十三年二月二十九日)……………87

国語学会会報 十(昭和二十三年三月三十一日)……………95

国語学会会報 十一(昭和二十三年十月二十五日)……………101

解説……………永野賢…123

国語学会の成立について

理事 東大教授 文学博士 時 枝 誠 記 氏

日本的な伝統と西洋言語学の基礎に立つ研究との合体の上に成立してゐる国語学は、極めて古く、且つ新しい学問であつて、種々複雑な要素を包含してゐる。真に体系的な国語学を建設するには、この学問の成立に検討を加へ、各部門各領域の間に統一ある組織を作らなければならない。学問の専門化によつて全体的総合的立場が欠けてゐるといふことと共に、国民生活の変遷につれて生ずる国語上の問題に対して国語学が何をなすべきかは、今日最も深く反省すべき事柄である。こゝにわが国語学会は、故橋本進吉博士の首唱により、多数の熱烈な賛同を得て昭和十九年三月に成立したのであるが、学会活動の先決問題たる機関誌の発刊は、折柄悪化する戦局の為に、殆ど編輯を了しながら遂に実現を見ずして終戦を迎へた。今日益々、学会の使命が痛感される時、出版書肆の努力により遠からず実現することを期待し、会員諸君の諒承を請ふ次第である。

研究の復興について深く責任を感じる我々は、学会事業の一たる講演会開催を計画し、過去を顧み新建設を企てる意味で、主題を明治以後の主要問題、国語の変遷・方言・音韻等に関する研究について、新鋭学徒に順次講演を依頼することとし、今日第一回を開くことになつた。講演会としての特色を生かして、時間の許す限り講演終了後質疑応答の機会を作りたい。なほ、今回は講師も在京の方に限られてゐるが、今後は中央地方に偏らない総合的学会の実をあげたい。また本会は、あらゆる部門、あらゆる学風の連絡機関たることを使命とするものであつて、研究のみならず国語問題・国語教育に対しても、厳正な批判的精神を堅持すべきものと考へてゐる。学会の発展に対し、諱憚なき批判

と援助を請ふ次第である。

国語アクセント史の研究が何に役立つか

文部省嘱託 金田一 春 彦 氏

国語アクセント史の研究などといふと如何にも特殊な研究のやうに聞えるが、国語の他の部分の研究に聯関をもたないわけではない。二三その例をあげれば、

(一) 国語の音韻史の研究への助言。「腭」と言ふ語は名義抄に「ハアギ」と記した例があるが、此の語の当時のアクセントから考へても、第一音節が長く発音されたことが推定される。「蛇」もアクセントから考へて古代京都語ではヘービだつたらしい。「見上げる」「見下す」などの「見」は、現在琉球語で長く発音されるが、これらも古代京都語で長く発音されてゐたと推定される。

(二) 国語の文法史の研究への助言。多くの助詞や或る助動詞は、そのアクセントから考へて、古代においては現在よりも一語としての独立性を多分に具へてゐたと推定される。四段活用を終止形と連体形とは文字の上では全く同形であるが、古代京都語ではアクセントの上に差別があつた。それ故、古今集の「鳴くなり」の「鳴く」の如きは、古写本の声点から、終止形か連体形か判定出来、随つて次の「なり」が指定か詠歎か判別される。等。

(三) 古典の解釈・語源の研究への助言。皇極紀の「はろくくとコトぞ聞ゆる」のコトは、古写本の声点から見ると、「琴」ではなくて「詞」を意味してゐたらうと推定される。「来る」の語源は「来」十助動詞「たり」と見るよりも「来」十「至る」と見るべく、「足引」のアシは「足」説よりも「葦」